ことばの二面性についての研究
—声と文字に関する基本的考察—

A study on the duality of words
—A basic consideration on voice and letters—

前納 弘武[1]
Hiromu Maeno[1]

[1]大妻女子大学名誉教授

キーワード：話しことば，書きことば，文字，　音声
Keywords：Spoken language, Written language, Character, Voice

1．研究目的

本研究は，今日における「ことば」のあり様，即ち，「電子文字」に代表されるように，「文字文化」が社会を覆い尽くしている現状の中で，果たして，現代の「電子文字」は，従来の活字に代表される「文字の文化」と同列に考えてよいものか否か，活字文字とは異質な問題性が潜んでいるのではないか，「文字文化」の一旦を占めながら，「電子文字」は「声の文化」の要素を色濃く内包しているのではないか，こうした今日的問題を考察する．

そのため，本研究では，ことばの二面性に立ち返って，その基本的な問題点の整理を試みる．ことばの二面性とは，言うまでもなく，「話しことば＝音声」と「書きことば＝文字」の二面であるが，両者に関わる基本的な考察を原理的なレベルにまで進めていくと，そもそも今日，ことばの研究には，ある種のパラダイム転換が必要であるとの認識に辿り着く．今日的な「電子文字」がもたらす問題性についても、新たなパラダイムのもとでの考察が必要と考えざるをえず，以下では，このことば研究に必要なパラダイム転換について，若干の紙幅を費やすこととしたい．

2．ことば研究のパラダイム転換

日常，人々は，話しことばと書きことばを適宜使い分けながら社会生活を送っている．これを反映して，ことばの研究についても，両者の区別を前提に展開され，強いて言えば，大方の研究例は，「話しことば＝音声言語」の側面からのアプローチ，他は，「書きことば＝文字言語」の側面からのアプローチ，この二態に分かれるようだ．

例えば，ソシュールを始めとする近代の言語学は，終始，音声言語を念頭に進められてきた．ことばというものが，その発生の原初的なかたちから考えれば，声としてのことばを言語学が重視するのはごく一般的なスタンスであろう．そこでは，文字は音声によって発せられたことばを写すものにすぎないと位置づけられ，文字が扱われるときは，表音のあり方に関する問題にのみ限定されて，文字言語は音声言語の書き写しにすぎないと見做されてきたのである．そもそも，ことばというものは，音声によって発せられるものであり，文字として書かれたものは，本来，ことばではなく，文字そのものとして議論すべきというのである．その結果，文字言語は音声言語に比して副次的なものにすぎないとする観念が，ことばの研究の底流に根強くはびこってきたのである．

他方，これに対する反論も少なからず存在するのであって，白川静の漢字研究などは，音声言語一辺倒の近代言語学の流れに抗する代表的な研究といってよい．白川の研究が文字言語を重視する理由は，漢字を直接の研究対象としているのみならず，氏の言うところによれば，ソシュール以降の言語学が，認識論の領域にまで踏み込んで，「実存主義的言語学や構造言語学などが生まれ，ついには認識と表現の一般にまで及んで記号学と

なり，絵画や映画・演劇までも表現としての言語の一部とみなされるようになった」．しかるに今日，漢字もまたそうした趨勢の中で，一種の「文字映像」として新しく位置づけられる必要がある，と．

その上で，視覚的思考性においては，漢字もまたある意味では映画の映像と共通するところがあり，かくして，「文字が映像であるならば，ことばもまた概念の映像である．しかも漢字の映像としての記録性のうちには，文字の草創期におけるその概念の世界が，視覚的形象として定着し，共時的事実として，表現の体系をなして伝えられている」との見解を披瀝する．白川の立場からすれば，音声言語も文字言語も何らかの映像を伝えるとの意において，自らの研究対象たる漢字を重視するのは当然のこととしながら，しかしそれ以上に，文字もまたことばそのものに他ならず，「文字の草創期におけるその概念の世界が，視覚的形象として定着し，共時的事実として，表現の体系をなして伝えられている」という指摘は，文字言語の成立が音声言語の成立と「共時的事実」とみる注目すべき考え方を提起している．

このように，ことばの二面性という問題については，いずれか一方の側面から研究に入る場合が多いが，その両者には共通の重大な特徴が潜んでいる．その特徴とは，そもそも，ことばの基本的な捉え方に関する問題であって，従来の研究では，ことばを社会的なコミュニケーションの道具とみなす観念を基底においてきた点にある．この通念がいずれの研究にも通奏低音となって響いており，これまで，ことば研究，言語研究の根幹となってきたのであった．

通常，我々は，音声言語にしても文字言語にしても，ことばを伝達の道具，つまりは，コミュニケーションのメディア，特に，文化的構築物としてのメディアと捉えて何の疑問を抱くこともない．それが常識的な見解を固定化してきたのであったが，改めて考えてみると，まさにこの点に，従来のことば研究の限界ないしメディア研究の限界が存したとみられるのであって，ことばを伝達の道具として捉える限り，コミュニケーション論的認識の外側に一歩も出る事はできないのである．

確かに、ことばは伝達の道具であるに違いはない．それゆえ，社会学ないし社会情報学や社会心理学の分野では，コミュニケーション論の深化に力が注がれてきたのであった．しかし，ことばを「伝達の道具」とみる通念に対するオルタナティヴとして，井筒俊彦の次の指摘は，ことば研究に必要なパラダイム転換の方向性をまことに的確に示している．井筒はいう．

「一般に近代の言語学者は，社会的記号コードとしての言語，つまりラング，に対立するものといいますと，すぐ発話行為パロールを考えます．ラングとパロール，それが普通の考え方です．しかし実際は，ラングとパロールを対立させる以前に，ラングの底に潜んでいる深層意味領域というものを考えなくてはならない．それでこそ初めて，そのような，いわゆる意味の太古の薄暗がりから立ち現れてくるパロールの創造性というものが，本当に理解できるようになるのではないかと私は思います」．

ここに井筒のいう「ラングの底に潜んでいる深層意味領域」とは，「いわゆる意味の太古の薄暗がり」と形容される不可視の領域であって，普段，可視的な生活レベルで我々が駆使していることばの意味交換という行為，つまり，「パロールの創造性」というものは，結局，そこから，即ち，「意味の太古の薄暗がり」から，つまりは，「ラングの底に潜んでいる深層意味領域」から生み出されてくるものに他ならないということである．言わば，「伝達の道具」としてのことばそれ自体が，様々な意味交換としてのことばのやりとり，即ち，「パロールの創造性」を可能にする形で表に出てくる以前の段階における様態，言い換えれば，ことばが生み出される，つまりは，意味が生み出される不可視の領域，「深層意味領域」にまで視野を広げなければことばの問題は解けないと，井筒は指摘しているのである．

ことばというものは，通常，我々が常識的に理解しているような，伝達の道具としてのインストルメンタルな側面，表面的な側面のみではなく，「深層意識領域」にまで遡って，ことばを捉え直す必要があるというのが井筒の主張に他ならない．これを受けて，丸山圭三郎もまたラングとパロールの対比以前に，ソシュールのいう人間のランガージュの営みそれ自体の重要性を指摘している．そこでは，ことばが「伝達の道具」になる以前の，未だことばとしての形になる以前の，意識の深層においてことばが立ち上がってくるあり様が問題というのである．

端的に言えば，ことばには，表層領域と深層領域の二つの問題領域があり，ことばの表層領域で

の位置付けでは，これを「伝達の道具」とみなす．それが常識的な見方であるが，「伝達の道具」になる以前の深層領域=「意味の太古の薄暗がり」では，何らかのことばを生みだすための「思考」が渦巻いており，さしずめ，主体と対象とのあいだの，意味形成への苦しみが，深層領域でのことばの問題性ということになろうか．

このように，井筒は，「社会的記号コードとしての言語」，つまり「ラングの底に潜んでいる深層意味領域というものを考えなくてはならない」と指摘するわけであるが，ここにいう「意味の太古の薄暗がり」ともいうべき領域の範例を，井筒は，弘法大師空海の真言密教の世界に求めている．

３．空海思想の言語論的性格

真言密教ないしは真言宗という様に，その開祖空海の密教思想の根幹は，真言，即ち，「まことのコトバ」のあり様を鮮明にする点にある．

一般に，空海の宗教思想は，私見によれば，第一に，「現在性の宗教論」，第二に，「全体性の哲学論」，第三に，「一体性の文化（言語）論」，この三つの柱から構成された体系とみることができる．第一の「現在性の宗教」について言えば，空海の思想の特徴としてしばしば指摘される「即身成仏」の論は，「成仏の遅速」に関わる問題性を帯びており，世の衆生が成仏に至る時間的問題を俎上におくものであった．この問題に対して，空海の密教は，従来の「顕教では，生身の人間が悟りを得るには，幾度も生まれ変わり，数えきれない年数をかけて修行しても，きわめて困難だと考えている．それに対して密教では，父母より授かった生身のままで，成仏することが可能であると説く．自己の眼を見開くことによって，即時に，この肉体のままに成仏することを，即身成仏という」．

実際，空海の著作『即身成仏義』の冒頭では，「大乗諸経論では，成仏するには極めて長い時間の修行が必要だという「三劫成仏」を説いております．ところがいまここでは真言密教の「即身成仏」を主張しようとしております」と述べ，空海出現以前の仏教が，成仏に至る道筋を修行の過程とその深まりとして，遠い将来にあるもの，さらには，死後の世界の事として説いてきたのに対して，空海は，まことに簡潔に，「いまこの時に」人間はこの肉体のままで成仏することができると説く．こうした空海の教えは，まさに「現在性の宗教」とみなすことができるのであって，おそらく，当時の人々にとっては，生の世界を明るくしてくれる大きな光明として受け入れられたのではないであろうか．では，人々は，いま現在の肉体のままで成仏できるとして，それは如何にして可能なのか．具体的にはどのようにすればよいのか．これに関わる思想系が，第二，第三の柱であり，これに対して空海の用意する回答は，「宗教的瞑想（瑜伽）によって，法身の説法を受け取ることができ」，「凡夫といえども真理に開眼すれば，即時に成仏しうる」という．真理に開眼することが即身成仏の条件となるわけである．とすれば，いかなる真理に開眼すれば成仏できるのか．その開眼すべき真理の内容こそ，空海の思想を「全体性の哲学」として認識する事，この点を正当に認識してこそ，真理への開眼が可能になるという．

こうした「全体性の哲学」としての空海思想の第二の柱は，仏教を一つの全体的世界として統合する認識体系（哲学）を構築し，当時の仏教諸派の差異性を乗り越える理論的根拠を明示することとなった．その統合の原点に位置する経典が「大日経」に他ならず，空海は，所謂，曼陀羅の中央に位置する大日如来を真仏と仰ぐ仏陀観を樹立したのであった．仏陀が中央に座すということは全体を見渡すことのできる視座に立つということであり，その意味で，曼荼羅は「全体性の哲学」の図像化に他ならない．これを基底に，空海は、己の主張する密教を宇宙的視野にまで拡げ，仏陀は宇宙の深奥に一体化しており，仏陀を軸とする宇宙は自己や他者をも含み，動植物のみならず，生命をもたぬと思われている石ころや土砂，風や水，星や月など一切の存在物がいずれも生命をもち，それらが相互に密接に関連した世界を構成しているとみなす．

こうした視座において，空海の思想の中に，「全体性の哲学」という契機を見出すものであり，さらに，一つの全体の中で，動植物や無機的なものにまで生命活動を見出し，様々な物的存在が相互に関連し合うとみるところに，空海思想の第三の特質，「一体性の文化論」の展開をみることができる．既に，空海思想の究極の一体性は，宇宙的大自然との一体化にあるが，その宇宙的全体の中で，耳に聞こえるものや眼に見えるもの，音響や色彩や形象として経験されるもの，主体の前に拡がる物的な存在一つ一つには，本稿の主題

たる「声と文字」が一体となって内包されていると説く．ここに，空海独自の言語論の出発点があり，かつまた到着点がある．このことを明らかにした空海の著作『声字実相義』によれば，その冒頭に有名な次の一文がみえる．

「夫れ如来の説法は，必ず文字に籍る．文字の所在は，六塵その体なり．六塵の本は，法仏の三密，即ち是なり．平等の三密は，法界に偏じて常恒なり．五智・四身は，十界に具して欠けたること無し．悟れる者をば大覚と号し，迷える者をば衆生と名づく．衆生癡暗にして自ら覚るに由無し．如来加持してその帰趣を示し給う．帰趣の本は，名教に，非ざれば立せず．名教の興りは，声字に非ざれば成ぜず．声字分明にして実相顕わる」．

ことばとは，人間文化の始源に位置するものであるが，空海の言説から要点のみ簡潔に抽出すれば，文字というものは，人間に備わっている「六根」（眼耳鼻舌身意）の認識対象になる「六塵」（色声香味触法）の全てに内在しており，「六塵」に内在する文字を借りて，如来の説法がなされる．それを通して，衆生は，「六識」（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）を感得するに至るわけだが，すぐれた教えでなければ，衆生の行くべき根本を示すことはできない．「すぐれた教えは，文字によらなければ成り立たない．声字が明らかであってこそ，ものごとの真実の姿があらわれうるのである」．こうして大日如来は，「声字実相」の理を説いて，則ち，法身説法によって衆生の眠りを覚醒に導くというのである．

特に，声と文字の関連について言えば，外界に存在する「六塵」の一つ一つは，環境の中で空気や風に乗って響き合うものであり，その響きが「声」として現れ，「声」が起こると，必ず物事の名義名跡を「字」として現すことになる．つまり，「字」は，その根本にある意味喚起の働きによって，物の名を表し，物の本質を明らかにし，物の存在を他と区別することになる．「声」と「字」の一体化したことばがなければ，物は本質を持つことができず，自らの存在を主張することもできない．物が存在するという事実は，ことばとして存在しているのであって，ここに，「存在はことばである」という命題が成立する．そして，空海は，物の本質を示す名，物の存在を確固たるものにする名について，「名の根本は，法身を根源とする．彼より流出して稍く転じて世流布の言と為るまくのみ」という．悟りの当体である仏（法身）を源とする名は，「そこから流れ出して末節に至って，世間一般に使われている言葉にまでなる」のだと説くのである．

4．存在としてのコトバ

空海の思想に，「存在はことばである」という命題を見出したのは，先にも述べたように，井筒俊彦であった．この命題をめぐって井筒は，本来，不可視の領域たる「意味の太古の薄暗がり」，「ラングの底に潜んでいる深層意味領域」におけることばの問題性を探求する．その際，井筒は，「コトバは社会制度的記号システムとして，第一次的には人間相互間のコミュニケーションの手段として，（中略）初めからそこに出来上がっている．人間はただそれを使うだけ」と普通は考えがちであるが，「本当は，コトバは決してそれだけではない」とし，ことばについての通念のかなた向こうに立ち入って，次のように敷衍する．即ち，

「（コトバは）コミュニケーションや表現より先に，もっと大事な，根源的な機能，人間を人間たらしめる機能がある．それはコトバの意味生産機能，そしてさらに進んで，その意味が存在を生産していく機能，意味の存在生産機能，と言うことであります．つまり，コトバは意味を通じて存在世界を産み出していく」．存在世界を産み出したことばは，やがて，世間一般に使われている言葉になる，とは，空海の指摘するところであったが，全く意味の存在しない世界，「意味の太古の薄暗がり」を「意味が未だ分節されていない世界」として把え，かかる「絶対的無分別の存在」の現場を，サルトルの『嘔吐』に描かれた一節に求めている．

「『ついさっき私は公園にいた』とサルトルは語り出す．『マロニエの根はちょうどベンチの下のところで深く大地に突き刺さっていた．それが根だということは，もはや私の意識には全然なかった．あらゆる語は消え失せていた．そしてそれと同時に，事物の意義も，その使い方も，またそれらの事物の表面に人間が引いた弱い符牒の線も．背を丸め気味に，頭を垂れ，たった独りで私は，全く生のままのその黒々と節くれ立った，恐ろしい塊りに面と向かって座っていた．』」

サルトルのこの記述は，絶対無分別の存在の深淵を垣間見た体験，前後左右，何が何だかわけのわからない不気味な混沌たる「存在」の泥沼にのめりこみ，「嘔吐」を催すほかない体験のその時，ことばというものを完全に消失した状況を形象化した一節とみることができる．そしてそこから，具体的な「存在者」としての自己を回復していく道のりに，ことばの意味作用の働きが介在することに注目して，次のように述べる．

「コトバの意味作用とは，本来的には全然分節のない「黒々として薄気味悪い塊り」でしかない「存在」に色々な符牒を付けて事物を作り出し，それらを個々別々のものとして支持すると言うことだ．老子的な言い方をすれば，無（すなわち，「無名」）がいろいろな名前を得て有（すなわち，「有名」）に転成するということである．」

このように，井筒は，「意味の太古の薄暗がり」「黒々として薄気味悪い塊り」から立ち現れてくることばが，物や人間の存在を規定して，物を物たらしめ，人間を人間たらしめて，その存在を確固たるものとする機能を，コトバの意味生産機能，さらには，意味の存在生産機能とする．ここに，コトバが存在を生産する時，存在はコトバであり，コトバは存在それ自体であると見做すことができる．この一連の過程を，井筒は，ことばの意味分節機能と呼んで，次のような解説を加える．

「『分節（articulation）』とは，文字通り，例えば竹の節が一本の竹を幾つもの部分に分けていく，区分けしていくということ．もともと素朴実在論的性格をもつ常識的な考え方によると，先ずものがある，様々な事物事象が始めから区分けされて存在している．それをコトバが後から追いかけていく，ということになるのだが，分節理論はそれとは逆に，始めにはなんの区分けもない，ただあるものは混沌としてどこにも本当の境界のない原体験のカオスだけ，と考える．のっぺりと，どこにも節目のないその感覚の原初的素材を，コトバの意味の網目構造によって深く染め分けられた人間の意識が，ごく自然に区切り，節を付けていく．そして，それらの区切りの一つ一つが，「名」によって固定され，存在の有意味的凝結点となり，あたかも始めから自立自存していたものであるかのごとく，人間意識の向う側に客観性を帯びて現象する．たんにものばかりではなく，いろいろなものの複雑な多層的相互連関の仕方まで，すべてその背後にひそむ意味と意味連関構造によって根本的に規定される．それがすなわち存在の地平を決定するものであり，存在そのものである．」

ここに述べられた意味分節理論が西洋で起ってくるのは，18世紀後半から19世紀にかけて，ドイツのフンボルトあたりからだという．しかし，東洋では，この考え方の歴史は古く，大乗仏教の諸流派，なかでも，空海の説く真言密教の場合は，「例外的に，コトバの意味分節の所産である経験的世界の事物事象の実在性を，真正面から肯定する」思想として現れたという．このことばの意味分節機能によって，何らかの意味が生産され，存在が生産される仕組みを，今日のことばのあり様に，当てはめて考えれば，新たにどのような景色が見えてくるのであろうか．

５．今後の課題―意味分節理論と AI

さて，世はAIの時代である．本稿の課題は，いわば，AI時代におけることばの問題，そこにおける「電子文字」の特殊性を考察するにあった．そのために，何故，空海の言語論，井筒言語哲学の核心たる意味分節理論にまで関説してきたかといえば，これらの問題がAI問題の核心と関連するからである．AI問題，即ち，人工知能研究や認知科学の分野においては，従来から「フレーム問題」なる課題が難問とされてきた．フレーム問題とは，「ある行為が遂行される際に，状況に応じて，関連のある（レリヴァントな）事項だけをいかにして効率的に選択するのか」という問題である．この問題を人間は概ね克服できるのに対して，AIは，未だ克服できていない．AIは，ただビッグデータの中の一つを選択することしかできないのである．

では，なぜ人間はできるのか．大澤真幸によれば「その理由はよくわかっていない」．だが，フレーム問題に際して，人間は「関与的ではない特徴に関しては端的に無視することを通じて，重要な特徴だけを抽出している」という．この場合，何を無視し何を重要な特徴として選択するかは，意識的ではなく無意識のうちに行われている．無意識の作用ということは，深層意識領域でのことばの意味分節機能が関与しているのではないか．AIが，深層意識領域をもたないのはいうまでもな

い．この問題について，引続き検討を深めることとしたい．

参考文献（頁数の明示は省略）

[1]丸山圭三郎『言語と無意識』講談社現代文庫，1989.
[2]白川静『漢字百話』中公文庫，2002.
[3]宮坂宥勝『空海コレクション２』ちくま学芸文庫，2004.
[4]井筒俊彦『意識と本質』岩波文庫，1991.
[5]井筒俊彦『井筒俊彦全集第８巻』慶應義塾出版会，2014.
[6]大沢真幸『コミュニケーション』弘文堂，2019.

付記

本稿は平成 30 年度共同研究プロジェクト（炭谷晃男代表「ことばの二面性についての研究」）の成果を筆者の文責において纏めたものである．